

◆ 今週のコメント

- ・ 腸管出血性大腸菌感染症の報告が1例あります。O103(VT1)によるもので、本年の累積報告数は31例です。O103型は、本市では、平成12年(1件)、平成20年(4件)に報告されています。
- ・ 細菌性赤痢の報告が1例(20歳代、男性)あり、本年2例目となっています。推定感染地域は、国外(タイ・カンボディア)です。感染症法の施行(平成11年4月)以降では、平成12年が28例と最も多く、その後、平成17年までは9件～15件の間を推移していましたが、平成18年以降は、平成18年3例、平成19年4例、平成20年、21年が各1例と、少ない状態が続いています。
- ・ 新型インフルエンザのまとめ等、平成21年の京都市内の感染症の発生動向を取りまとめた、「平成21年京都市感染症発生動向調査事業実施報告書」を、ホームページに掲載しましたので、下記アドレスを御覧ください。
<http://www.city.kyoto.lg.jp/hokenfukushi/page/0000009961.html>

◆ 今週のトピックス: <流行性耳下腺炎>

流行性耳下腺炎の定点当たり報告数は、0.93(38例)で、依然として過去5年平均値(0.36)を大きく上回っています。詳細をトピックスに掲載しています。

◆ 発生状況

全数把握の感染症

- ・ 二類:結核 1例(肺結核 1例, 肺外結核 なし, 潜在性結核感染者 なし), (喀痰塗抹陽性 1例)
【1月以降の累積報告数 252例(肺結核 159例, 肺外結核 66例, 潜在性結核感染者 27例), (喀痰塗抹陽性 73例)】
- ・ 三類:細菌性赤痢(ソネ) 1例【1月以降の累積報告数 2例】
- ・ 三類:腸管出血性大腸菌感染症 1例【1月以降の累積報告数 31例】
- ・ 五類:アメーバ赤痢(腸管アメーバ症) 1例【1月以降の累積報告数 14例】

定点把握の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点68, 小児科定点41, 眼科定点10, 基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ*	インフルエンザ	0.01	1
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	2.39	98
	② 流行性耳下腺炎	0.93	38
	③ 突発性発しん	0.56	23
	④ 水痘	0.41	17
	⑤ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.34	14
眼科	流行性角結膜炎	0.80	8

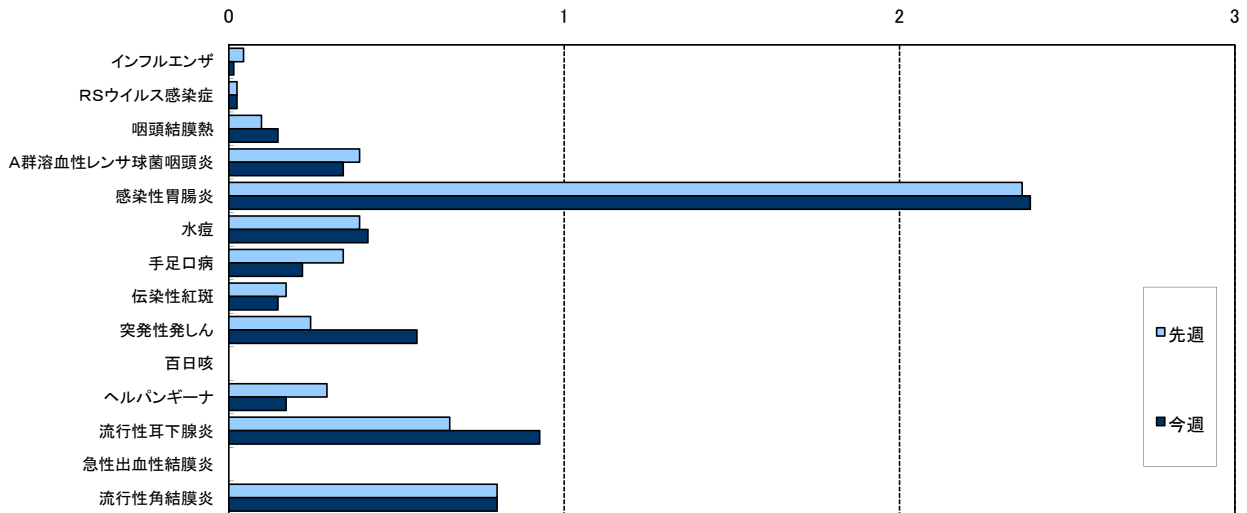
【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: <流行性耳下腺炎>

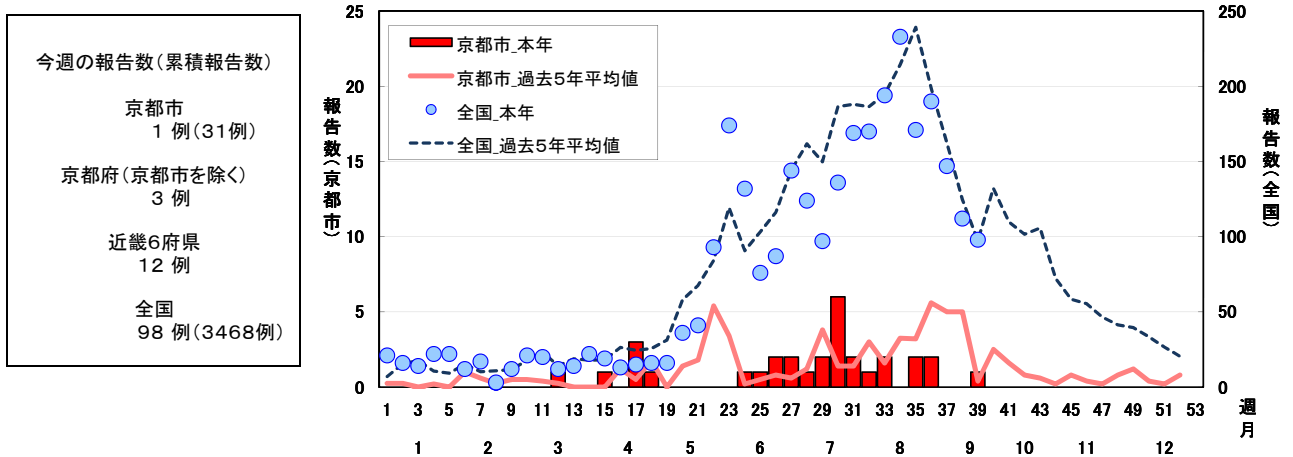
(注) 京都市のデータは、平成22年10月7日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。
また、本情報での患者数は、届出医療機関所在地での集計で、患者の住所を示すものではありません。

◆ 発生状況の概況グラフ

1 今週(第39週)と先週(第38週)の定点当たり報告数の比較

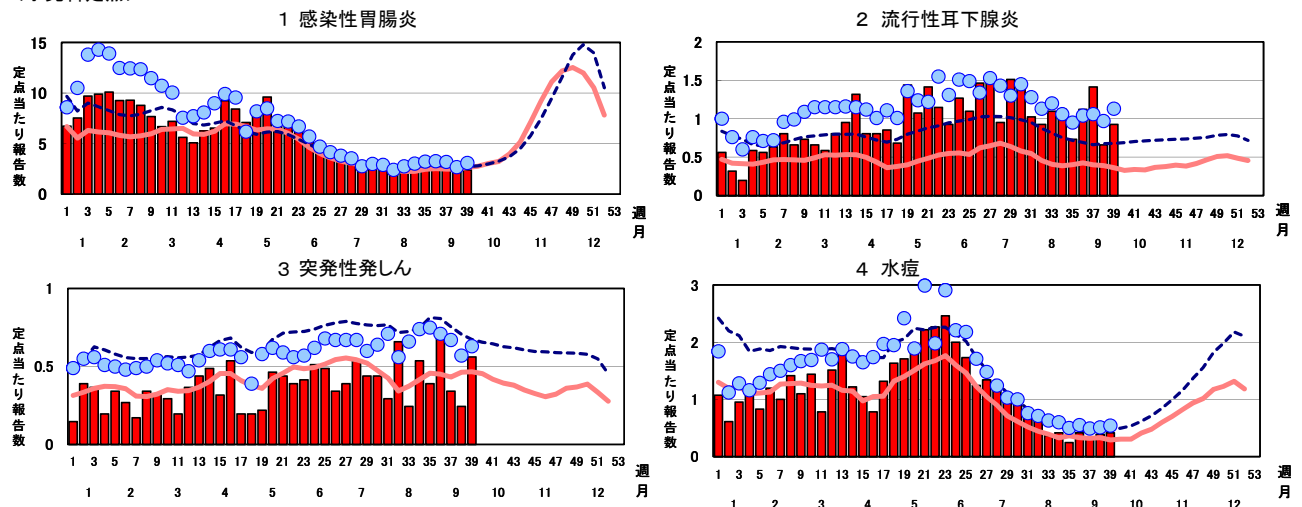


2 腸管出血性大腸菌感染症(三類感染症)の推移

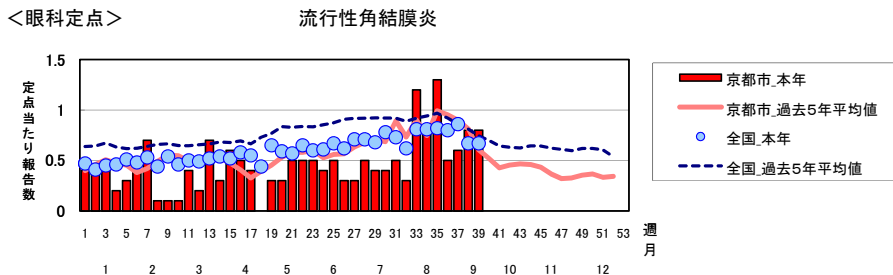


3 主な感染症の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>



<眼科定点>



第39週(9月27日～10月3日)トピックス: <流行性耳下腺炎>

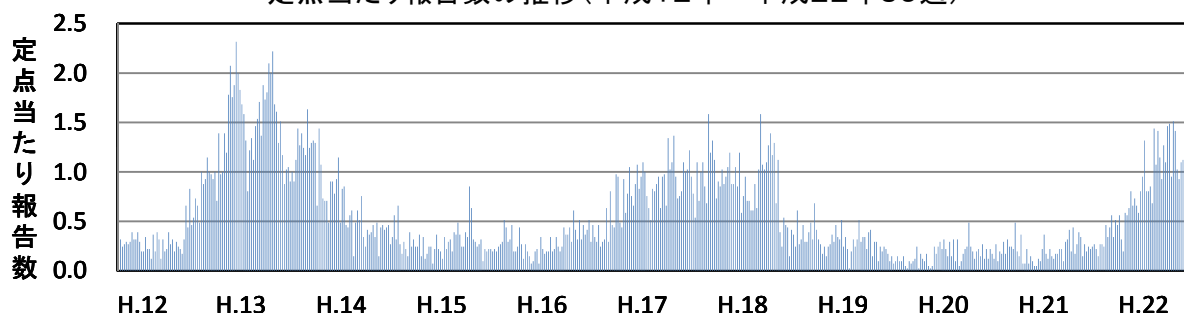
流行性耳下腺炎の定点当たり報告数は、0.93(38例)で、依然として過去5年平均値(0.36)を大きく上回っています。

定点当たり報告数の推移(平成12年～平成22年39週)をみると、数年おきに報告数が多くなっています。

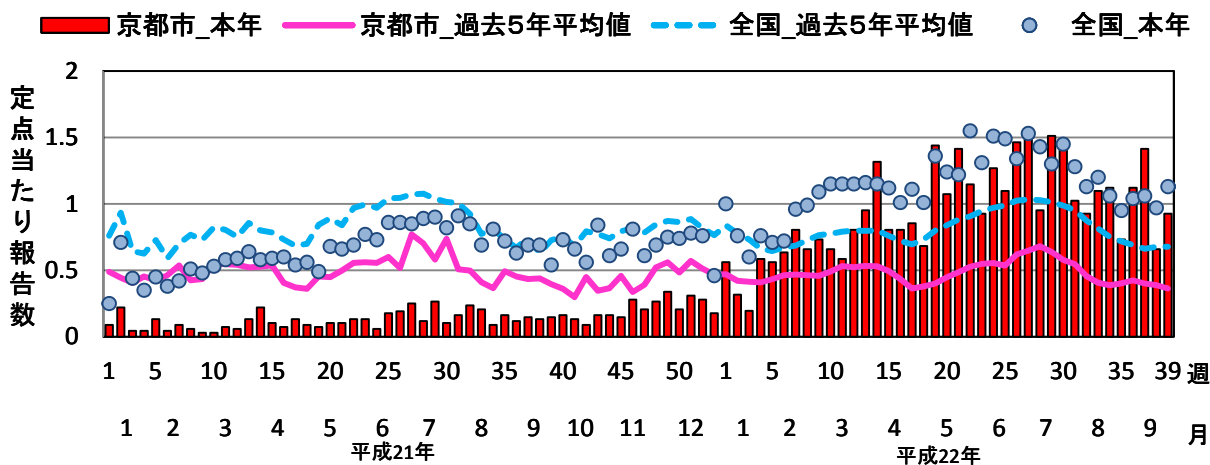
本市及び全国の定点当たり報告数の推移をみると、平成21年以降、報告数の増加が続いており、本年第4週を境に、過去5年平均値を上回る状態が続いています。

年齢階級別にみると、5歳が9例(23.7%)と最も多く、次いで6歳が7例(18.4%)、4歳が6例(15.8%)となっており、4歳から6歳までが57.9%を占めています。

定点当たり報告数の推移(平成12年～平成22年39週)



本市及び全国の定点当たり報告数の推移(平成21年～平成22年39週)



年齢階級別割合の推移

